

3

新型コロナウイルス感染症の輸血療法への影響

〔座長〕 慶應義塾大学 輸血・細胞療法センター 田野崎隆二
〔座長〕 東京都立駒込病院 輸血・細胞治療科 奥山美樹

① オーバービュー

東京都立墨東病院 輸血科 藤田 浩

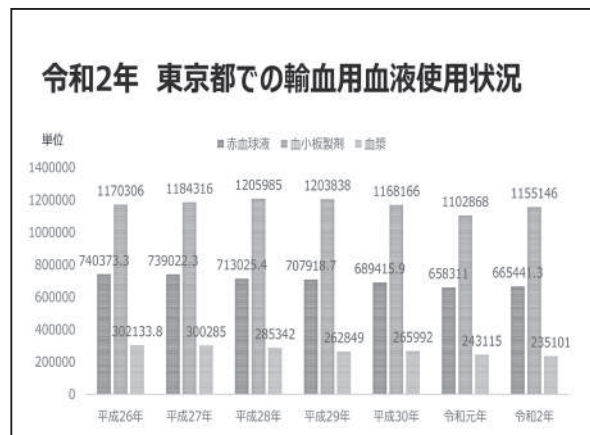
【スライド1】

新型コロナウイルス感染症の輸血療法への影響のオーバービューを発表します。東京都立墨東病院輸血科、藤田浩です。



【スライド2】

令和2年の東京都での輸血用血液使用状況を示します。縦軸は、使用単位数、横軸は年次を示します。左の棒グラフは、赤血球液、真中の棒グラフは、血小板製剤、右の棒グラフは血漿製剤です。令和2年、新型コロナウイルス感染症拡大した最初の年ですが、前年の令和元年と比較して、赤血球液、血小板製剤はやや増加し、血漿製剤はやや低下しておりました。



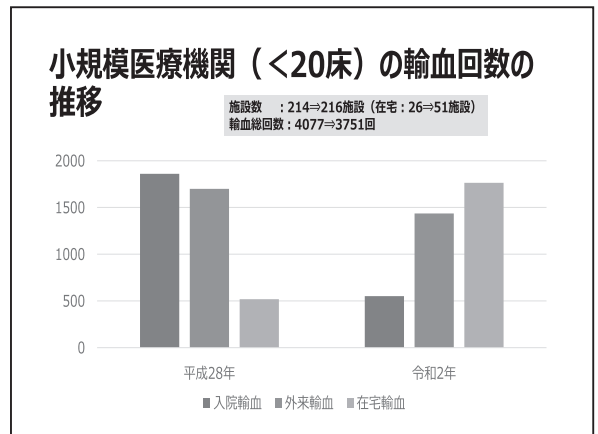
【スライド3】

令和2年の東京都での自己血輸血状況を示します。縦軸は、使用単位数、横軸は年次を示します。自己血輸血は年々減少しておりましたが、令和2年は、令和元年と比較して、約1万単位ほど減少しておりました。



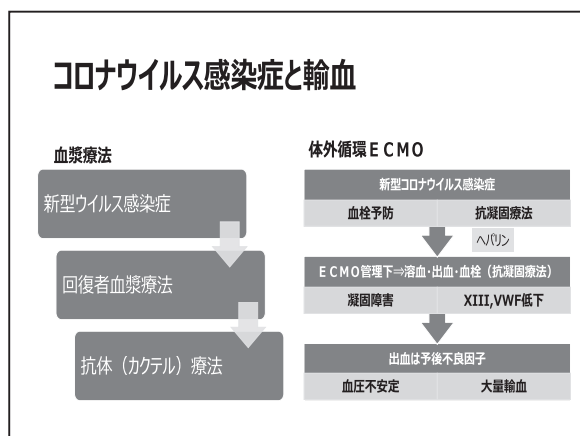
【スライド4】

小規模医療機関、20床未満の輸血回数
の推移を示します。縦軸は、輸血回数、平成28年と令和2年のデータを示します。輸血実施施設数は微増、輸血回数はやや減少しておりますが、左の棒グラフのように、入院形態での輸血件数が、平成28年と比較して、令和2年では著明に減少を認めました。それに対して、真中の棒グラフのように外来輸血はやや低下、右の棒グラフのように在宅輸血は増加に転じておりました。



【スライド5】

コロナウイルス感染症と輸血との関連事項を示します。一つは血漿療法です。エボラ出血熱の時も同様だったように、新型コロナウイルスの発生に対して、回復者血漿療法が検討されます。新型コロナウイルス感染症も、回復者血漿療法が検討され、抗体カクテル療法へ展開しております。二つ目の視点では、体外循環 ECMO と輸血の関連です。



新型コロナウイルス症は血栓症を合併しや

すく、抗凝固療法を ECMO の有無にかかわらず使用しています。重症患者には ECMO 装着する際には、抗凝固療法の影響を鑑み、穿刺時には注意が必要で、ECMO 使用時にはさらに抗凝固療法をしっかりと行います。そのような状況下で、血液凝固 XIII 因子やフォンビルブランド因子が低下する凝固障害が合併すると、穿刺部位や各臓器に大量出血が起こります。血圧が不安定になり、かつ大量輸血になります。出血は、ECMO 装着患者の予後不良因子になります。

【スライド6】

オーバービューを踏まえて、回復者血漿療法について、慶應義塾大学 輸血・細胞療法センターの田野崎隆二先生、ECMO 使用時の輸血療法について都立墨東病院救命救急センターの杉山和宏先生に解説していただきます。東京都の輸血用血液の使用状況を示しましたが、在宅輸血の立場からトータス往診クリニック大橋晃太先生、血液センターの立場から東京都赤十字血液センターの澤村佳宏先生に御講演いただきます。最後に、ディスカッションを予定しています。

本日のシンポジウム		
シンポジウム	新型コロナウイルス感染症の輸血療法への影響	<座長> 田野崎 隆二 (慶應義塾大学 輸血・細胞療法センター) 奥山 美樹 (都立駒込病院 輸血・細胞治療科)
	① オーバービュー	藤田 浩 (都立墨東病院 輸血科)
	② 回復者血漿療法について	田野崎 隆二 (慶應義塾大学 輸血・細胞療法センター)
	③ ECMO使用時の輸血療法について	杉山 和宏 (都立墨東病院 救命救急センター)
	④ 在宅医療の立場から	大橋 晃太 (トータス往診クリニック)
	⑤ 血液センターの立場から	澤村 佳宏 (東京都赤十字血液センター)
	⑥ ディスカッション	座長・講師